



Title	Patient satisfaction with surgery for cervical myelopathy due to ossification of the posterior longitudinal ligament
Author(s)	藤森, 孝人
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59031
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	藤 森 孝 人
博士の専攻分野の名称	博 士 (医学)
学位記番号	第 2 5 1 5 4 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	Patient satisfaction with surgery for cervical myelopathy due to ossification of the posterior longitudinal ligament. (頸椎後縦靭帯骨化症患者における術後患者満足度)
論文審査委員	(主査) 教 授 吉川 秀樹 (副査) 教 授 吉峰 俊樹 教 授 菅本 一臣

論 文 内 容 の 要 旨

〔 目 的 〕

頸椎後縦靭帯骨化症（頸椎OPLL）に対する手術成績は医師立脚型評価法でしか評価されてこなかった。今回、これらの頸椎OPLL術後患者に対して満足度調査と患者立脚型評価を行い、満足度に関連する因子について分析を行った。

〔 方 法 〕

1981年から2004年までの間に大阪大学関連施設において手術を施行された頸椎OPLL患者103人（男性74人、女性29人）を対象とした。手術時平均年齢は57歳、術後平均追跡期間は9年であった。2009年にこれらの対象患者に対して郵送によるアンケート形式にて①独自の満足度調査票、②患者立脚型評価法である日本整形外科学会頸部脊髄症評価質問票（JOACMEQ）、③the 36-Item Short Form Health Survey（SF-36）、④不安抑うつテスト（Hospital anxiety and depression scale）を送付し返信されたものを調査した。満足度調査票は「非常に満足」から「非常に不満」までの5段階評価でのクローズドタイプの質問とし、その理由をオープンタイプの質問で自由に記載できるようにした。また、手術による改善、家族友人に手術を勧めるかという質問を同時に行った。従来型の医師立脚型評価として日本整形外科学会頸髄症判定基準（旧JOAスコア）と改善率を算出した。満足度に関連する各項目を統計学的に解析した。まず5段階の満足度に対する各項目のSpearmanの相関係数を算出した。さらに、満足群と不満群を比較し、有意差のある項目を調べた。上記、2つの方法で求められた項目を対象として満足度を目的変数としたstepwise Logistic分析を行った。

〔 成 績 〕

死亡、転居による28名を除外した75名にアンケートが郵送された。そのうち、69名から回答を得た。回答率は96%であった。回答を得た69人とそれ以外の34人の間に年齢、性別、手術術式、手術成績などの各項目において有意差はなかった。満足度評価では69人の内、55人（80%）の患者が手術治療に満足していた。7人（10%）の患者はどちらでもなく、7人（10%）は不満であった。58人（84%）の患者は手術により改善したと報告し、56人（81%）は家族、友人に手術を勧めると回答した。改善がみられたと報告した患者はすべて手術結果に満足していた。Spearmanの相関係数による評価では満足度にはQOL（JOACMEQ）、身体機能（SF-36）、社会生活機能（SF-36）が有意に相関していた。満足群と不満群の比較では不満群で疼痛が有意に大きく、下肢機能（旧JOAスコア）、最大改善率（旧JOA）、下肢機能（JOACMEQ）、QOL（JOACMEQ）、身体機能（SF-36）、社会生活機能（SF-36）、活力（SF-36）が有意に低かった。

Step logistic分析にて、満足度に関連する因子としては、身体機能 (SF-36)、QOL (JOACMEQ)、下肢機能 (JOACMEQ)、JOL最大改善率が選択された。

〔 総 括 〕

頸椎OPLLに対する手術成績はこれまで、60-80%のJOA改善率が報告されていたが、患者サイドからの評価報告はなかった。今回の調査から、80%の患者は頸椎OPLLの手術成績に満足しており、患者立脚型評価でも手術治療の有効性が示された。また、統計学的解析から、満足度は、QOL、下肢機能を中心とした身体機能、改善率に関連していた。しかし、依然10~20%の不満群も存在し、手術にあたっては十分な病状、手術説明が重要と考えられた。

論文審査の結果の要旨

頸椎後縦靭帯骨化症は、従来は手術治療自体に危険性が伴う難治性疾患であったが、近年徐々にその治療成績は安定してきた。手術の安全性が確保された現在、患者要求の高まりも相まって、より患者に即した治療が求められるようになってきている。従来は医師側の成績評価しかなく、患者視点からの評価が欠けていた。本研究では、それを補うべく頸椎後縦靭帯骨化症に対する手術成績を種々の患者立脚型評価法と、満足度という視点から調査し、良好な成績を収めていることを証明した。また、多角的な統計解析を用いて、患者視点からの治療満足度が、手術による改善度や、疼痛、下肢機能に強く相関していることを示し、今後の頸椎後縦靭帯骨化症治療にあたり有用な知見となった。対象数や、追跡期間、解析も十分であり、学位に値するものと認める。